

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教 育 学 ）	氏名	柳 本 大 地
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p>韓国語を母語とする日本語学習者の日本語漢字単語の処理過程 —韓国2言語間の形態異同性と音韻類似性を操作した実験的検討—</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教 授 松 見 法 男</p> <p>審査委員 教 授 中 條 和 光</p> <p>審査委員 教 授 深 澤 清 治</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、韓国語を母語とする日本語学習者（以下、韓国人学習者）を対象とし、認知心理学の観点から、日本語漢字単語の処理過程を実験的に検討したものである。具体的には、韓国語と日本語（以下、韓日）における漢字単語の形態異同性と音韻類似性を操作し、語彙判断課題及びプライミング法を用いた意味一致性判断課題における反応時間を測度として、日本語漢字単語の視覚的・聴覚的処理過程を調べることを目的とした。実験では、日本語の学習環境に基づく漢字単語の処理経験の違いが、日本語漢字単語の処理過程に及ぼす影響も検討し、韓国人学習者における漢字単語の心内辞書モデルを提案した。</p> <p>論文の構成は、次のとおりである。</p> <p>第1章では、韓国語の言語的特徴と韓国における漢字使用の現状について説明し、韓日2言語間の形態異同性と音韻類似性の定義を述べた。第二言語の単語処理における心内辞書構造を検討した先行研究を吟味し、韓国語の特徴に基づいた仮説的心内辞書モデルを提示した。そして、本研究の実験課題について説明し、実験結果から心内辞書内の2言語の語彙表象及び概念表象の連結関係を解釈する際の説明論理を記述した。</p> <p>第2章では、第二言語の学習者における単語の処理過程を検討した先行研究を概観した。表音文字を使用する印欧語族の言語話者を対象とした研究や、中国語を母語とする日本語学習者（以下、中国人学習者）を対象とした研究について、視覚呈示または聴覚呈示された単語の処理における2言語の語彙表象（形態表象、音韻表象）と概念表象との連結関係、並びにそれらの活性化がもたらす効果という観点から整理し、本研究の研究課題を述べた。</p> <p>第3章では、語彙判断課題を用いた4つの実験を行い、上級の韓国人学習者における日本語漢字単語の処理過程を検討した。日本留学中の上級学習者の視覚的処理（実験1）、韓国国内の上級学習者の視覚的処理（実験2）、日本留学中の上級学習者の聴覚的処理（実験3）、韓国国内の上級学習者の聴覚的処理（実験4）について、それぞれ語彙判断課題の反応時間と誤答率を分析した。その結果、視覚呈示された日本語漢字単語の処理過程では、形態情報と音韻情報が独立して意味処理に影響を及ぼし、音韻類似性による促進効果が見られるが、学習環境（漢字の処理経験）によって形態異同性による効果が異なることが明らかとなった。他方、聴覚呈示された日本語漢字単語の処理過程では、形態情報と音韻情</p>			

報が相互に関連して意味処理に影響を及ぼし、音韻類似性の効果が学習環境によって異なること、すなわち、日本留学中の上級学習者では抑制効果が見られ、韓国国内の上級学習者では促進効果が見られることが明らかとなった。これらの結果に基づき、韓国人学習者の漢字単語の視覚的・聴覚的処理における心内辞書モデルを提案した。

第4章では、韓国人学習者における日本語漢字単語の心内辞書構造を解明することを目的とし、学習者の母語である韓国語の音韻表象の活性化に焦点を当て、プライミング法を用いた実験を行った。日本留学中の上級学習者を対象とし、先行呈示される韓国語単語と後続呈示される日本語単語との意味一致性判断課題における反応時間と誤答率を分析した。プライム単語の呈示開始からターゲット単語の呈示開始までの SOA (Stimulus Onset Asynchrony) を操作し、実験5では SOA を 300ms に、また実験6では SOA を 800ms にそれぞれ設定した。その結果、日本語漢字単語の聴覚的処理において、韓国語の音韻表象の活性化が抑制効果をもたらすことが明らかとなった。2言語間での異形単語は、日本語の音韻表象と形態表象の連結が強く、日本語の形態表象から韓国語の音韻表象を経由して意味処理される。2言語間で音韻類似性の低い単語も、日本語の形態表象から韓国語の音韻表象を経由して意味処理される。これら実験5、6の結果は、同じく日本留学中の上級学習者を対象とした実験3の結果解釈の妥当性を追検証するものであった。

第5章では、実験1～実験6のまとめを行い、上級の韓国人学習者における日本語漢字単語の視覚的・聴覚的処理過程について、上級の中国人学習者における特徴と比較しながら総合考察を行った。そして、本研究の意義、日本語教育への示唆、及び今後の課題を述べた。

本論文は、次の3点で高く評価できる。

1. 従来、日本語教育の分野で漢字単語の処理過程を扱う研究は、その多くが、中国人学習者を対象としたものであった。本研究では、母語での漢字使用経験が少ない韓国人学習者を対象とし、韓日2言語間の形態異同性と音韻類似性を操作した実験を行うことによって、中国人学習者とは異なる日本語漢字単語の処理過程を解明した。
2. 漢字単語の処理経験の違いという観点から学習環境の異なる上級学習者を設定し、視覚呈示と聴覚呈示の両事態を用いた実験を行うことによって、韓国人学習者の漢字単語の視覚的・聴覚的処理における心内辞書モデルを提案した。
3. 心内辞書内の語彙・概念表象間の連結関係、及び各表象の活性化に基づく漢字単語の処理過程を解明するため、語彙判断課題を採用した実験結果の解釈の妥当性を、SOA を操作したプライミング法による意味一致性判断課題の実験で追検証した。第二言語の単語の処理過程を調べる実験研究に対して、方法論的に新たな視点を提供した。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成29年2月7日